

日本海中部地震と津波災害

防災情報機構 NPO 法人 会長 伊藤 和明



1983年5月26日（木）の正午直前、秋田県の沖合い約80kmの海底を震源としてM7.7の大地震が発生した。「日本海中部地震」と命名されたこの地震は、日本海の東縁、北米プレートとユーラシアプレートの境界で発生したもので、日本海側としては、地震観測が始められて以来、最大規模の地震であった。

この地震による津波は、北海道の南西岸から秋田県・青森県の沿岸を襲い、大災害をもたらした。津波による被害は、秋田県下が最大だったが、青森県や北海道の沿岸部でも浸水被害を生じている。さらに津波は日本海を西へと進み、島根県の隠岐の島や朝鮮半島の東海岸、さらにはシベリアの沿岸にまで到達している。

一方、内陸部では各所で地盤の液状化災害が発生した。津軽平野、能代平野、八郎潟干拓地、秋田平野などで、液状化により建物や道路が被災した。秋田市や能代市では、沼や湿地を埋め立てて造成された新興の住宅地に、液状化による被害が集中した。地震と津波により、934戸が全壊し、52戸が流失した。

また、700隻あまりの船が、津波によって沈没あるいは流失した。全体での死者104人のうち100人が津波による犠牲者であった。津波の高さは、青森・秋田両県の沿岸で3～7m、秋田県の峰浜村では14mの遡上高を記録している。

津波の第1波は、地震発生から7分後に青森県の深浦に到達し、8分後には男鹿半島の沿岸に到達した。このとき、気象庁仙台管区气象台が大津波警報を発表したのは、地震発生から15分後の12時14分であった。したがって、津波警報が発表されたときには、すでに津波の第1波が沿岸に到達していたことになる。「もっと早く警報を出せなかったのか」という声も聞かれたが、当時の津波予報体制では、これが精一杯だったのである。



秋田港の荷揚げ施設の被害状況

誤った言い伝え

この津波災害のあと、現地取材して驚いたのは、「日本海側には津波は来ない」という言い伝えのあったことである。海底を震源とする地震があった場合、まずは津波の襲来を警戒しなければならないのに、かなりの人が津波を意識していなかったと思われる。

確かに、東北地方の太平洋岸は、昔からたびたび津波災害を受けてきているので、住民の意識も高いのだが、日本海側では近年、津波によって顕著な災害の発生したことがなかったため、住民の意識も低かったものといえよう。

さらに驚いたのは、男鹿半島では、「地震が起きたら浜へ逃げろ」とまで言い伝えられていたことである。地震のあと浜へ逃げたら、津波に遭いに行くようなものなのだが、なぜそのような言い伝えが蔓延したのだろうか。

実は、1939年5月1日（月）に起きた男鹿地震（M6.8）のとき、男鹿半島では、各所で山崩れや地すべりが起きたため、「山の際には危険だから、浜へ逃げろ」という言い伝えが生まれたものと考えられる。

では歴史をひもといてみたとき、日本海沿岸に津波をもたらした地震は、いつごろだったのか調べてみると、近年では、1964年新潟地震のときに津波が発生しているが、津波による死者は出ていない。

さらに昔を調べてみると、津波によって死者のでた事例は、1833年（天保4年）に起きた庄内沖地震（M7.2）まで遡ることがわかった。この地震のときは、庄内地方や能登の沿岸を大津波が襲い、地震と津波によって100人近い死者が出ている。

日本海中部地震の発生は1983年だから、150年間も犠牲者をだすような津波災害が、日本海沿岸では起きていなかったことになる。150年のあいだには、世代が次々と交代してしまい、過去の出来事が伝承されないまま、日本海中部地震による津波災害を蒙ることになったのである。

遠足児童の悲劇

日本海中部地震の起きた日は晴天で、多くの人が海岸に出ていた。そのため、釣り客18人が津波に吞まれて死亡している。秋田県の能代港では、火力発電所を建設するための埋め立て工事が進められていて、現場で働いていた作業員35人が津波の犠牲になった。

なかでも多くの人の涙をさそったのは、男鹿半島の加茂青砂海岸で、遠足に来ていた小学生13人が津波の犠牲になったことである。秋田県の北東部、つまり内陸にある合川南小学校の4年生と5年生で、生徒45人と引率の先生2人が、父兄の運転するマイクロバス2台に分乗して遠足に来ていた。

地震が起きたとき、一行はバスの中で強い揺れを感じたのだが、目的地に着いたときには、揺れも治まっており、海も静かな状態であった。そこで、先生も子どもたちも浜に出て、弁当を広げはじめたところへ、大津波が襲いかかってきたのである。地震発生から約8分後のことであった。

一瞬のうちに海に流された先生や子どもたちを、地元の人々が舟を出したり、ロープを投げるなどして、懸命に救助にあ



秋田港の岸壁の被害状況

たったのだが、児童13人だけは助からなかった
のである。

地震の翌年、秋田県男鹿市が発行した「1983
年日本海中部地震 男鹿市の記録」には、津波
に流されたものの、一命を取りとめた遠足児童
の体験記が載せられている。その中に、当時小
学5年生だった福岡真理子さんの手記があるの
で紹介しよう。

彼女は、津波の来る前、友だちと3人で加茂
青砂の海岸に下りて、弁当を食べはじめていた
(以下原文のまま)。

『私達は早くご飯を食べて、貝がら集めや砂
浜での遊びをしようと、みんなよりも先にご飯
を食べ始めました。その時、近くの男の人達が
すわっている大きな岩に、急に波がぶつかって来るのが見えました。私はなんだかわからなくて、ただじっと見ているだけでしたが、だれか大人の人が「にげろー、にげろー」とさけんだので、私はリュックサックと弁当を持ってにげました。だけど「あーあー」と思って前を見たら一面波になり、いきにくねのところまできてしまい、みんなは「だれか助けてー、だれかー」とひっしにさけんでいました。私はあまりにも思いがけなく、信じられなくて、さけぶこともできませんでした。

気がついたら大きな木につかまっていた。私といっしょにつかまっていたのは、四年生三人と五年生一人と運転手の人でした。そして、私たちのつかまっている木はだんだん流され、みんなのいるところから遠ざかっていくばかりです。

そのとき、助けに来た人の姿が見えました。でも急に後から大きな波がきて、みんなをひとのみにしてしまいました。その時にリュックサックもぼうしも、みんな流されていきました。

私は海底で、上にあがろうといっしょうけんめいもがきました。もう少しで浮き上がれると思ったときにまた大きな波がきて、海の底におしつけられてしまいました。もうだめだと思っているとき、だれかにぐいっとひっぱられ、海の底からのがれることができました。その人とたてに並ぶように浮かんでいましたが、もうこのままどこかへ行ってしまふんではないかと思っているとき、ボートの音が聞こえてきてやっと助けあげられました。

私はいくら天災だからといっても、



能代港



男鹿市加茂青砂海岸に建つ「合川南小学校児童地震津波殉難の碑」

友達をうぼうような海がにくいです。』

まことに迫真力のある津波体験記ではないだろうか。

加茂青砂海岸での惨事のあと、引率者に対して、「海岸で地震を感じたなら、なぜ津波を予想しなかったのか」という厳しい批判が相次いだ。

それとともに、「もし、かつての国語教材「稲むらの火」が、今も教科書に残っていたなら、この悲劇は防げたかもしれないのに」という声が上がったのである。

いま加茂青砂海岸を訪れると、大津波の犠牲になった児童たちの霊を慰めるための慰霊碑が、ひっそりと建てられている。

筆者はのちに、加茂青砂の現場をたずね、子どもたちが流された砂浜に立ってみた。ふと後ろを見ると、海岸と砂浜とのあいだは、護岸堤防で仕切られていた。堤防の高さを測ってみると、4.5mあった。これでは津波に気づいても、子どもたちが駆け上がることはできない。

しかもこの堤防は、上の方が海に向かってせり出すように湾曲していた。いわば波返しのかたちになっていたのである。そのため、津波が襲来したときに、子どもたちもみな海へ流し返されてしまったことになる。

また、男鹿市戸賀塩浜にある男鹿水族館では、新婚旅行で訪日したスイス人カップルのうち女性が津波にさらわれて死亡した。その後、津波による犠牲者を記録にとどめ慰霊するために、男鹿水族館駐車場わきにマリア像が建立されている。



男鹿市戸賀塩浜に建つスイス人女性犠牲者の慰霊碑「マリア像」

間一髪の機転

日本海中部地震の際、被災現場でのとっさの機転が多くの人命を救った事例がある。秋田県北部の八森漁港でのことである。

八森は、地盤の固いこともあって、地震動による被害が殆どなかったため、地震後も多くの人が港内で働いていた。気象庁からの津波警報を受けて、NHKが「大津波警報発表」を流したのが12時19分、この時はまだ20～30人が港内で仕事をしていた。

一方、八森港の漁業協同組合に勤務していた48歳の女性が、大津波警報の発表をテレビの画面で知ると、直ちにマイクを握って有線放送のスイッチを入れ、「ただいま津波警報が発令されました。厳重にご注意ください。」と繰り返し呼びかけた。この緊急放送によって、はじめ津波が接近していることを知り、港内の人びとがみな避難をしたという。

津波の第1波が八森港に襲来したのは、12時21～22分、テレビで警報が伝えられてから、わずか2、3分のことであった。まさに間一髪の機転が、多くの人命を救ったといえよう。